



TITLE:

リカアドの勞賃論とマルサスの人口原則

AUTHOR(S):

森, 耕二郎

CITATION:

森, 耕二郎. リカアドの勞賃論とマルサスの人口原則. 經濟論叢 1927, 25(2): 250-262

ISSUE DATE:

1927-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128567>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷五十二第

行發日一月八年二和昭

論叢

營業稅の課稅標準

法學博士 神戶正雄

文化現象の凝集作用

法學士 恒藤恭

意味現實態

文學博士 米田庄太郎

國家の組織

法學士 作田莊一

近世の港

文學博士 三浦周行

說苑

リカ
アド勞賃論ミマル
サス人口原則

經濟學士 森耕二郎

植民及び植民地の意義

經濟學士 長田三郎

雜錄

フオードの勞賃論

經濟學士 星野周一郎

一九二六年度の英國銀行界

經濟學士 道上清治

國際經濟會議

法學士 沙見三郎

説

苑

リカアドの勞賃論とマルサスの人口原則

森 耕 二 郎

一

キリアム・ベティに始まる古典學派經濟學——資本家的生産事情の内部的關係を研究せるものは、フイジオフラート、アダム・スミスを経てリカアドに至りて、ほゞその完成體を成就したるものであつて、凡ゆる從來の經濟學は一先づリカアドに於てその極點に達したものであると云つてよい。勞賃論の歴史に於ても亦同様のことが云はれ得る。ベティ、フイジオクラートに於て見出される勞賃の生存費説はその後アダム・スミスの踏襲するところとなつたが、既に他の機會に於て吟味したやうに、彼はそれを十分に展開發展せしむるに至らなかつたのである。しかるにリカアドに至つてこの勞賃論は彼れの學説の分つべからざる一部分となり、彼れの透徹なる論理により、それは甫めて一つの學問的成形を勝ち得るに至つたものである。彼れの諸々の學説の重要さからして、それが凡ゆる方面に極めて重大なる影響を及ぼしたやうに、彼れの勞賃論も亦、

學問界、社會運動の兩方面に亘りて、ひとり當時のみならず、末長く、諸々の大なる影響を齎したものである。マルクスの勞賃論、ラサールの所謂勞賃鐵則說、およびそれらに本づく社會運動に及ぼせる影響は、その最も著しい例證である。

このリカアドの勞賃論は、第十八世紀より第十九世紀の初葉に亘りて完成せられたる英國産業革命に伴ふ勞賃低下、勞働者窮迫の事實——異常なる富の増加との對立的關係に於ける——を果してよく説明し得たであらうか？——問題の提出。

嘗て述べたやうに、リカアドに依れば、勞働の市場價格は、その需要(資本)が供給(勞働人口)に超過せる場合には、その自然價格の上に昇り得るのであるが、然る場合に於ては、勞働者の境過は佳良となり、結婚は奨励せられ、隨つて出生數は増加し、その結果は勞働人口の資本に對する過剰となり、その市場價格は久しからずしてその自然價格に落付かざるを得ない。これに反し、勞働人口の供給がその需要に超過せる場合に於ては、勞働の市場價格はその自然價格より下ることとなるが、然る場合に於ては、勞働者の境遇は不良となり、結婚は阻止せられ、出生數は減退し、ために勞働人口はその需要に及ばざることとなり、結局勞働の市場價格はその自然價格に復歸することとなるのである。要するにリカアドに在りては、任意に増加し得る一般商品の場合に於て、たとひ一時的に商品の市場價格がその自然價格の上下に逸脱することあるも、久しからずして、兩者は一致し得るに至るの機構を、一般平均利潤率の法則に見出したやうに、リカアドは勞働(力)を商品的一種となし、その市場價格と自然價格とを認め、さうしてその兩者の一致

の機構をマルサスの人口法則に求めたのである。かくリカアドに於て勞働(力)が一つの商品として觀せられ、一般商品の價值法則が等しく勞働(力)商品にも妥當するものとせられたことは、リカアド勞賃論の特徴乃至長所を成すのであるが、この兩者一致の機構として果して一つの自然法則たるマルサスの人口原則は、正當に選ばれ得るであらうか？ 即ちそれは現實の勞賃運動の機構として果して堪え得るであらうか？ 結局マルサスの人口原則に立脚せるリカアドの勞賃論は、果してよくこの資本主義生産方法の下に於ける勞賃現象・勞働者の『人間疎外』の状態を説明し得たであらうか？ 私はこの問題を茲に問題として見たいと思ふのであるが、——問題 限定——この小文に於ては、(一)リカアドの勞賃論とマルサスの人口原則との關係、(二)マルサス人口原則の樞軸、(三)マルサスの勞賃論と彼れの人口原則との關係、および(四)現實の勞賃運動とリカアドの勞賃變動の理論、を問題とするに止め、マルサス人口原則そのもの、檢討、並びにそれに纏はる諸々の問題に就ては他の機會に譲ることとする。

二

すでにリカアド以前の學者にして勞賃の生存費説を主張せるものは、殆んど常に何等かの形に於ける人口運動の理論をそれが變動の機構として加さるはない(例へばチュルゴー、スミス)。又マルサスの人口原則は、單りリカアドの勞賃論のみならず、收穫遞減の法則と相並んで、彼れの全分配理論の基礎的前提を成してゐる。が人口原則を勞賃變動の機構として最も整ひたる形に於て取扱つたのが、リカアドの勞賃論であるばかりでなく、彼れのこの二者の關係は彼れの分配

論を理解する上に於て可成り大なる役割を演じてゐる。

リカアドは人口論を自ら精しく説く所はなかつたが、彼が如何にマルサスの人口法則に殆んど全部的に傾倒したかは、いろ／＼なる彼れの詞からして容易に推測し得る。

例へばマルサスがリカアドにその著『人口の原理』を贈つたときに、それに對する禮狀に於てリカアドは、『……私がこの書物から受けた一般的の印象は非常なるものである。その主張が頗る明瞭に又満足に説かれてゐるので、私は大なる興味を感じたのであるが、それは私がアダム・スミスのかの有名な著作を読んだときに得た興味に次ぐものである』¹⁾と云つてをり、その後間もなく又次のやうなことをマルサスに宛てたる書簡に於て書いてゐる——『私はそれを(マルサスの人口原理)今こゝに得て、再びこの新しい事柄を繰り返へし讀んだ。そして私はいろ／＼と工夫してあなたご意見を異にする所を見出さうと努めるけれども、極めて少し／＼かないのを見て驚いてゐる次第である。』²⁾

リカアドがこのマルサスの人口原理を承認前提することにより、彼の勞賃の運動を説明した文章は、かのリカアドの詞——『勞働の市場價格がその自然價格に超過せる場合に於て云々』、『勞働の市場價格がその自然價格以下に在る場合には云々』³⁾の外に左の如きものがある。

『人口の原則が人類の増殖に及ぼす作用のために、最低種類の勞賃は、自然と慣習とが勞働者の支持のために要求するところの率より以上に、決して甚だしく持續することがない。』⁴⁾(註)

(註) この點に就てのリカアドの文言はなほ多くあるが、そのうちの一つを左に引用する。

- 1) Letters of Ricardo to Malthus, p. 107.
- 2) Letters of Ricardo to Malthus, p. 144.
- 3) Ricardo, Principles, Gonner's ed., p. 71-2.
- 4) ibid., p. 140.

『若し勞働者の靴や衣服が、機械の進歩に依つて現にその生産に必要な勞働の四分の一で生産され得るやうになるならば、それらのものは恐らく七五パーセント下落するであらう。しかし勞働者がそのために永續的に一つの代りに四着の上衣を又四足の靴を、消費することが出来るであらうといふことは大の誤りで、競争および人口増加の刺激を惹起す結果、彼れの勞賃は遠からずしてそれを救して購入する必需品の新價值に適應するやうに定めらるゝであらう。』¹⁾

三

右に於て見たるやうに、リカアドはマルサスの人口原則を是認し、それを勞賃變動の機構として採用したのであるが、しからばこのマルサスの人口原則とは如何なるものか？ マルサスの人口原則の内容を今更こと新らしく吟味するのは興味あることではない。がごとの順序としてホンの要領だけを窺うて見る。

マルサスの人口原則の内容は、その『人口の原理』諸版の間に於て著しい差異があるので、これを概言するに苦しむのであるが、今極めてその大體を要約せんに、マルサスは先づ左の如き二個の公準(Postulata)から出發する。

第一 食物は人類の生存に必要なこと。

第二 兩性間の情慾は必要であつて、大體現狀を維持するであらうといふこと。²⁾

『これら二つの法則は、吾々が人類について何等かの知識を有つやうになつてこの方、吾々の性質についての確定法であつたやうである。吾々は、今迄この法則に何等の變化をも見なかつたのであるから、苟も初めて宇宙の秩序を作り、萬物の利益のために今もなほ確定の法則に従つて

1) Ricardo, Principles, pp. 10-11. その他 p. 75. 参照。

2) Malthus, An Essay on the Principle of Population, 1st ed. p. 11.

色々のことを司つてゐる神が、その力を直接に働かせない以上は、右の法則がやがて現在在るがやうでなくなるであらう、と結論する權利はないわけである。¹⁾

マルサスはこの二個の公準を前提とし、食物増加の歩合と人類の出生率との相關々係を問題とし、そこに彼れの人口原則を樹てる。即ちこの二者の比率が相適合する性質のものであれば問題はない。がマルサスに依れば、現實の事實はこれに反する。「人口の増加力は土地が人間の生活資料を生産する力よりも遙に大なるものである。人口は若し妨げらるゝことがなければ、幾何學的の割合にて増加する。しかるに生活資料は算術的の割合にて増加するにすぎない。」²⁾

この二つの力——人口の繁殖力と生活資料の増加力——は斯様に異なるものであるが、「人類の生活には食物が必要であるといふ吾々の性質に關する法則があつて、この二つの異なる力の結果を對等のものとしなければ止まない。」³⁾それは如何にして可能であるか？『動植物の兩界を通じて、自然は、その最も贅澤にして自由なる手を以て、生命の種子を廣く蒔き散らした。而してそれは場所と、それを育てるに必要な養分とを、比較的に吝んだ。地上のこの一點に含まれてゐる生命の胚種は、食物が豊富で、擴がり得る場所が充分であるならば、數千年の内には、數百萬の世界に一杯になるであらう。たゞかの萬物を支配する必然が、彼等を一定の限度に制限する。この一大制限の下には如何なる植物も、如何なる動物も服さねばならないので、人類も亦如何に理性の力に依るも、この法則から免れるといふことはできぬ。植物と動物とには、この結果として、種子の浪費と疾病と早死とがある。人類には窮乏と罪惡とがある。前者即ち窮乏は絶

1) *ibid.*, pp. 11-12. 高野大内氏譯本 12頁。譯文は大體これに據れども勝手に變改した所あり、以下同じ。谷口氏譯本手元になし、參照せず。

2) *ibid.*, pp. 13-4.

3) *ibid.*, p. 14.

對的にこの法則の必然的結果である。罪惡も殆んど恐らくはその結果であつて、吾々は現にその大いに普及せるを見るのであるが、たゞこれを以て絶對的に必然的な結果だと呼ぶことはできぬだらう。道德の試金石は邪惡の誘惡に抵抗することにある。¹⁾』

かくてマルサスはその人口の原理を要約して左の如く云つてゐる。

『人口の増加は必然的にその生活資料によつて制限せられる。

『人口は生活資料が増加すれば必らず増加する。

『人口の増加力の優勢は窮乏と罪惡とによつて抑壓せられる。而して現實の人口はこれによつて生活資料と均衡を保たしめらる。²⁾』

以上は『人口の原理』第一版に現はれたる所謂マルサス人口原則の骨子であつて、その後の版に於て引續き彼れの人口論の中樞的思想となつたものである。たゞ第二版以後に於て『道德的抑制』が附加さるゝことにより、この法則の自然法則的必然性が若干緩和さるゝに至つたことは普ねく知らるゝところである。

四

リカアドはこのマルサスの人口原則の上に立脚してその勞賃變動一致の機構を説明したのであると云はるゝが、果してこの二者は必然的な連關の下にあるであらうか？ 一見このことは殆んど自明であると思はるけれども、必らずしも然りと云へぬ。蓋しリカアドとマルサスとはともにこの人口原則に立脚してその勞賃論を説いてゐ乍ら、その勞賃論は同じであるとは云へぬか

1) ibid., pp. 14-6.

2) ibid., pp. 140-1.

ら。それ故に私はこの二者の連關を吟味するについて先づマルサスの勞賃論はその人口法則と如何なる關係の下に在るか、を若干吟味して置きたい。

マルサスの勞賃論は勞賃の需要供給説であつて、大體に於て、スミスの勞賃論のうちに見出される生存費説をリカアドが發展支持したるに對し、マルサスはその需要供給説を繼承主張したものであると見てよい。マルサスはスミスの詞——『勞働の貨幣價格は必らず二つの事情により左右される。勞働に對する需要、生活の必需品および便利品の價格は即ちこれである。』を實際上全く正しいとしてゐる。マルサスに従へば、『需要供給の原則は貨物並びに勞働の一時的永久的の最高の規制者である。生産費用は、それが勞働若くは貨物の永久的供給の必然的條件であるこの理由からしてのみ、これらの價格に影響を及ぼす。』¹⁾彼はこの勞働の需要を以て現實に勞働の維持に使用される基金、即ち生活必需品を意味し、勞働の供給を以て勞働者人口を意味する。さうして勞働の自然價格とはこの需要と供給とが合致したる場合成立する所のものである。即ち彼れの言葉に従へば、『勞働の自然的若くは必然的價格は、社會の現實の狀態の下に於て、平均的需要を満たすに十分なる勞働者の平均的供給を惹起するに必要な價格である。』²⁾そして勞働の市場價格即ち市場に於ける現實の價格とは、一時的なる原因からこの平均的需要を供給するに必要な所のものゝ上に若くは下に一時的にあるものである。』

この勞働の自然價格がリカアドのそれと、その内容に於て、異なる所あるは明らかである。リカアドは勞働の自然價格を以て、『勞働者をして相互に、増減又は減少することなしに、生計を維

1) Malthus, Principles of Political Economy, 1820, p. 241.

2) ibid., pp. 247-8.

3)

持し且つその種族を永續せしむるに必要な價格である』と定義してゐるが、マルサスに従へば、この價格は最も不自然なる價格である。『蓋し事物の自然的狀態の下に於ては、詞を換えて云へば、富と人口との進歩に對して大なる障害なき場合に於ては、かゝる價格は一般的に數百年に亘るも起り得べからざるものであるからである。かくこの價格が實際に稀であり、事物の通常の状態に於ては、かく遠き時點に存するものであるとせば、勞働の市場價格を以て單に一時的にその固定的價格の上下に乖離し、久しからずしてこれに復歸するものであると考ふることは、明らかに大なる誤謬に導くに相違ない。』¹⁾

要するにマルサスに於ては、リカアドに於けると同じく、勞働の市場價格と自然價格とがあるが、その自然價格なるものは極めて可變的一時的のものであつて、リカアドのそのやうに固定的のものではない。且つこの自然價格はリカアドに於けると異なり、單り勞働者の生活資料の價格によつて客觀的に決定せらるゝものではなく、更に勞働に對する需要——勞働基金によつて決定せらるゝものである。マルサスに従へば、農作又は農夫の資本を傷つけない何等かの他の理由により穀物の價格が下落せる時には、勞働の生産費は減少すると云はるゝかも知れぬが、勞賃が下落することはない。一八一五、六年に於ける勞賃の下落は農夫の損失に因る需要の減退によりてのみ惹起されたので、勞働の生産費の減少とは何等の關係がない。²⁾

この勞賃決定の理論に於てマルサスの人口原則は如何なる役目を演じてゐるかを見んに、彼に在りては、勞賃は勞働の需要——勞働基金が増大せる時に高いのであるが、かゝる場合リカアド

1) *ibid.*, p. 247.

2) “マルサスは自ら知らずして確かに勞賃基金説の父であつた”—— Bonar, *Malthus and his Work*, 2nd ed., p. 270.

の主張するが如く直ちに人口の増加が行はれ、久しからずしてもどの自然價格に落付くとはしない。即ちマルサスに在りては、かゝる場合勞働者は道德的抑制を行ふことによりてよく長くその勞賃を維持することができるのである。

かく云ふものゝリカアドとマルサスの勞賃論は、その特徴は程度の問題である程に、相手の主張に類似せる見解を有つてゐる。だがつまる所一般的に言つて、マルサス人口法則と勞賃決定との關係については、リカアドはマルサスの人口原則を主としてその本來的なる姿に於て見ることであり（勿論彼も亦道德的抑制を全然認めなかつたわけではない）、そこに勞賃變動一致の機構を認めたるに反し、マルサスはその人口法則の道德的抑制を高調することにより、勞働の自然價格のリカアドのそれより長く上昇し得る可能を云ふのである。

勞賃論と人口法則との關係についてのこの二つの見解の當否は問題の外に置き、兎に角リカアドの勞賃論がその最も本來的なる形に於てのマルサスの人口原則の上に論理的に正當に立脚せることは疑ふべくもない。かく一つの人口法則の上に立脚し乍ら、二つの異なる勞賃論が出たのは、二者がそれらの勞賃論を支持するにつき、この一つの人口法則をそれらの意味に於て採つたがためである。そしてそれは或る意味に於てともに論理的には一應正しいと云はれ得るであらう。

五

しからは次にリカアドの勞賃論と密接なる連關にあるところのかのマルサスの人口原則なるも

のは果して存在するであらうか、を問題としなければならぬ。がこの問題を取上げる前に、果して勞賃の變動は、實際上、リカアドの信するが如くに、かゝる自然法則たるマルサスの人口原則に支配さるゝや否やを吟味して置きたい。

勞賃の増加——勞働の市場價格のその自然價格よりの超過——に因る勞働人口の増加を見るがためには、云ふ迄もなく、生活資料が潤澤になるの結果、勞働者の結婚數が増大し、その結果出生數が増加し、而もその幼兒がそれゝ一人前の勞働者となるの過程を経なければならぬ。ゆゑにその増加に要する期間は普通十五年乃至二十年はかゝり、或はそれ以上に及ぶであらう。之と同様に、勞賃の下落——勞働の市場價格のその自然價格よりの下降——に因る勞働人口減少の過程は、生活資料の不足、結婚數減退、出生數の減少の過程であるから、これ亦可成りの長年月に亘らざるを得ない。つまり人口の自然的増加は、實際上、可成りの長年月に於て市めて實現されるのである。

ところが勞賃の變動の期間はかくの如く長くはない。リカアドは勞賃の一時的變動を問題とするのではないと云ひ、又勞賃の變動、調節は貨物の價格のその場合と異なり、長時間に亘つて市めて實現せらるゝことを自分自らも認めてゐる。例へば彼れの詞に左の如きものがある。

『若し需要に對して市場に於て餘り少しの帽子しかないならば、價格は騰貴するであらうが、しかしそれはたゞホンの暫くの間である。といふのは一年にしてより多くの資本がその商賈に投せられ、かくて帽子の分量は適當に増加せらるゝに至るであらうから。それゆゑにその市場價格はその自然價格を久しきに亘りて多く超えることができない。だが人についてはこのことは云へぬ。吾々は資本の増加ある時、一年か二年でその人數を殖やすことは出來ぬし、又資本の退歩的

1) マルサスの人口原則は道德的抑制の附加により若干自然法則たることから離れ得たと云ひ得ないではないが、にも拘はらずその本質上あく迄も自然法則として残つたことは否定できない。

なる場合、その人數を急速に減らすこともできぬ。だから勞働の維持基金の増減の急激であるのに、勞働者の人數の増減は緩慢である。随つて勞賃が穀物および必要品の價格に正確に左右せらるゝ前には、可成りの間隔があらねばならぬ。』

だが勞賃の自然的變動および調節の幅が如何に長いとは云へ、十數年乃至二十年に亘るが如きは想像し得られない。リカアドもかゝる長期間の變動を問題としたのではなからうし、又若し問題としたのであるならば、それは餘りに實際と遠ざかる。かゝる長期間内には、勞賃の變動および調節の幾度か、經驗さるゝに相違ない。この點についてはすでに當時マルサスの駁撃があつたが、その後マルクスは彼特有の立場からしてかゝる見解を駁してゐる。それに云ふ――

『資本が伸張する結果、勞働市場が相對的に不足となつて現はれたり、資本が收縮する結果、それが過充となつて現はれたりするといふ風に、資本の伸縮随つて又各場合に於ける資本の價值發展慾に従つて勞働の需要を規制せしめるのではなく、寧ろ反對に資本の運動の方を人口數の絶對的運動に倚存せしめるといふことは、十年毎に反復される循環と、その週期的なる諸段階――これらの段階は又、蓄積が進むに伴れて、絶えずより急速に續起する所の不規則的な動搖に依つて錯交されるのであるが――とを特徴とする近世産業の立場から見れば、實際美しい一法則であらうが、畢竟するところ經濟學者のドグマに外ならないのである。この見解に依れば、資本の蓄積に基いて勞賃は増騰するわけである。かく増騰した勞賃は勞働者人口のより急速なる増殖を刺激し、而してこの増殖は、勞働市場が過充となり、勞働者の供給に比して資本が相對的に不十分となるに至る迄持續するのである。茲に於て勞賃は低落し、メタルは裏返されることになる。勞賃の低落に依つて、勞働者の人口は次第に減少を來たし、これがため資本は再び勞働者の人口に

比して過剰となるか、又は他の人々が主張するが如く、勞賃の低落と、それに伴つて生ずる勞働者搾取の増進とは、更に蓄積の速度を増進せしめると同時に、一方、低廉なる勞賃は勞働者階級の増殖を阻止するに至る。かくて勞働の供給は需要以下となり、勞賃を昂騰せしめる時が再び生じ來るといふ風に、この關係が綿々として反復されて行く。發達した資本制生産にとつては、寔に美しい運動方法ではある。勞賃が増騰してその結果、現實的に勞働能力ある人口の積極的増殖が生じ得る以前に、産業戰の行はれねばならぬ期間は、戰闘を開始して勝負を決しなければならぬ期間は、幾度も幾度も經過されるであらう。』

要するに勞賃の實際上の變動と自然的なる人口の増減とは一致しない。リカアドのこの點についての見解は誤つてゐると云はねばならぬ。しかばリカアドの勞賃論は全然これを否定すべきであるか？ 或はそれともその勞賃變動調節の理論に於て不十分なる所あるに過ぎないので、その構造は大體に於てこれを承認せざるを得ぬであらうか？ 茲に於て勢ひ私はリカアド勞賃論の出發點であるところのこの機構としてのマルサス人口原則をそのもの、檢討に進み入り、リカアド勞賃變動理論の根本的誤謬が那邊に伏在するかを見極めねばならぬ。即ち一マルサスの云ふが如き自然法則としての人口法則は果して存在するか？ 二若し存在すると假定するも、果してかゝる自然法則たる人口法則は、我が社會現象に如何なる意義に於て、相交渉し相關聯するか？ 三凡ゆる社會形態を通じて妥當する何らかの社會法則としての、發展法則としての、人口法則の存在を認むべきか？ 四人口法則としては、或る特段なる社會形態に歴史的に特有なるものゝみ存在するに過ぎないではないか？——等々の重要な問題を問題とせなければならぬ。かくてこの小文はそれが緒論を成すのみ。(完)